

むらかみ・しんこ★パリでジャーナリストの仕事をした三十数年、フランスは日本に関心がなく、大きな後ろ盾もなくスタートした私は、苦労した。結果的にそれが広い人間関係を築き、作戦力を生み出すともなった。取材申し込みをさばく広報担当者がある時代でもなかったので大変だったが、目指す相手のオーケーを取る過程はエキサイティングでもあった。

村上新子の
「パリの新50代」レポート



世界最強の女性30にも選ばれた
サルコジ大統領の“切り札”、
ラガルド経済相に会ってきた。

今月のパリの50代

クリスティーヌ・ラガルドさん

政治家、弁護士

今フランスを代表する女性は誰か？世界的に知られる、となるこの人はいない。サルコジ大統領の切り札といわれる、クリスティーヌ・ラガルド経済・財政相（55歳）だ。世界各国の元首との会見や、得意の英語を駆使してG20などで渡り合う姿はカッコいい。「大臣の手帳」とはフランス語で超多忙を意味する表現。一般女性誌では、ラガルドさんのインタビューやルポを見たことがない。だから取材を受けるとの連絡がきたときは、信じられなかった。

私たちが迎えてくれたラガルドさんは、意外にも柔らかく穏やかな雰囲気。地位と権力のある政治家という威圧感はなかった。アメリカのベーカー&マッケンジー法律事務所、女性初の所長を経て政界へ。その理由を聞くと「選んだのでなく、向こうから迎えがきた」と言う。

2005年に政界に入り、07年経済・財政相に任命された。G8初の女性大臣として、欧米のマスコミからも歓迎されてきた。アメリカの経済誌「フォーブス」は「世界最強の女性30」（06年）に、また「世界で最も影響力のある女性



セヌ川を見下ろす執務室の壁の風刺画が目を引く。「自分を客観視して笑うことも必要」とユーモアに話す。



広い執務室はオブジェや写真、植物などが飾られ、住まいのよう。堅苦しい雰囲気を感じさせない。

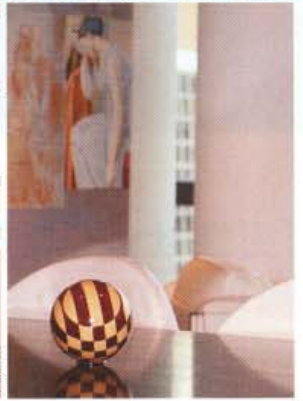
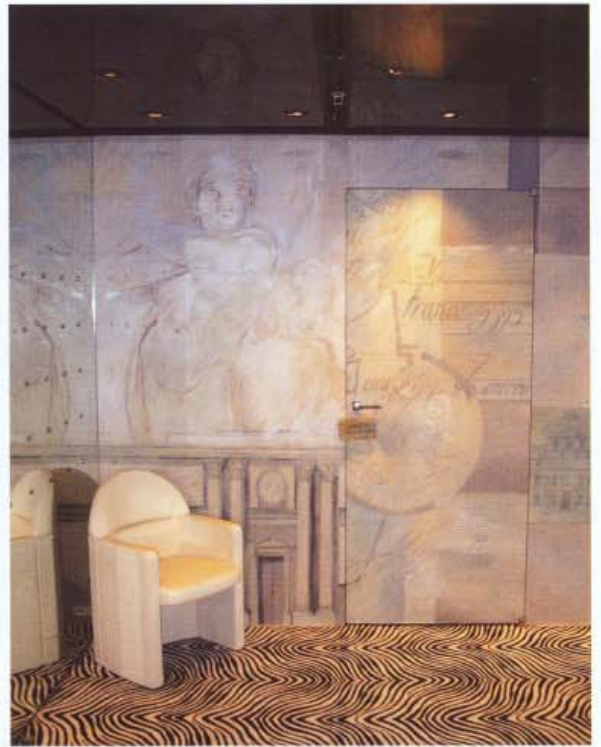


オバマ大統領と。完璧な英語を話すラガルドさんには、親交の深い世界のリーダーたちがたくさんいる。



**セーヌ川を見下ろす執務室は
白と黒が基調のモダンな空間。**

モダンなインテリアの明るい部屋。カーペットは当初グレーの無地だったが、「私に会いに来る人たちは、床ばかり見つめて私を見ない」と、ゼブラ模様へ替えさせた(目がチカチカして長く見てられない)。ユーモアがある大臣の素顔がうかがえるエピソードだ。178cmの長身。



100人」(07年)に、イギリスの『フィナンシャル・タイムズ』は「ヨーロッパ最高の経済大臣」(09年)に選んでいる。

サルコジ大統領は「策を弄したり、人の悪口を言わずに見事に成功した人の例が彼女だ」と、大臣会議の席で讃えたという。エレガントな生き方も、2番目の長命経済・財政相となった要因の一つだろう。1m78cmの長身、少女時代シンクロナイズド・スイミングで鍛えたすらりとしたボディ、美しいシルバーヘア。エルメスやシヤネルをさらりと着こなす、カッコいいパーフエクトレディー。

国際弁護士から政治家へ、グロ

バル時代にふさわしい、スケールの大きいキャリアはどのようにして築かれたのだろう。子ども時代のエピソードが興味深い。小さなころから「すでに autonome (自主的)だった」彼女は、7歳のとき、弟のベビーシッターを頼もうとしていた両親に「頼まないで、私が世話をする」と願ひ出て驚かせたという。最初の仕事(アルバイト)は? 「よく覚えていません。魚屋さんで、鱈がしがし。威勢のいいおかみさんで、楽しかった。得たお金でパービー人形の服を買いました」と楽しそうに語る。それから、売り子、水泳コーチなどの職を経験する。教職者の両親は、子どものころ、彼女をいろいろな国へ連れていった。外国人と多く交流し、世界は広いと知った。国単位でなく仕事をするのだと。



写真/ロイター/アフロ

Mme Christine Lagarde

1966年生まれ。'71年、シンクロナイズド・スイミングのフランスチームの一員として全欲選手権で銅メダル獲得。'81年、弁護士資格取得。'95~2005年ペーカー&マッケンジー法律事務所勤務。所長を務めた後、'05年仏政界入り。前夫との間に2人の男児。ジュエリーが好き。趣味はダイビング。



7階の執務室の窓からは、セーヌ川が見える。ベルシーの地名は経済・財政・産業省の別称。



上/ちよっとした植物が心を和ませる。下/十年半愛用のケリー包、ピクニックのバッグインバッグとして使っている！



きちんと整えられ、仕事机の後ろに飾られていた写真。



机とその周りは黒で統一。職務の合間にお茶を飲む。

左/広い執務室は、大きな仕事机のある部分と、10人くらいの会議ができる部分からなる。ラガルドさんはお茶好き。根のポットと大きなマグで、朝はブラックティー、午後は緑茶と飲み分ける。上/外国要人からの贈り物をはじめさまざまなオブジェがある。華やかな装飾の別はアラブからか？



上/大臣の執務室のある経済・財政省の建物1階のリポの扉には、歴代の経済・財政大臣のポートレート。ラガルドさんは初の女性大臣。その上在職期間最



経済・財政・産業省の外観。広場を囲むようにして、モダンな建物が並んでいる。

「男性社会で仕事をする女性は、無理に男性のまねをしてはいけません。自分自身であることを信じなければ」

ラガルドさんの仕事は、朝7時30分、自宅での日の資料を調べることから始まる。ベルシーの執務室に入るのは9時。取材の日は午前中、エリゼ宮で大統領やフィヨン首相との「高齢者問題の重要会議」があった。夜にはインドへ。ハードなスケジュールは心身共に過酷でないことこそない。一方で高い地位と権限。「権力の味は？」と問うと、「世界中の最高の才能たちと肩を並べて話せる。彼らの理想や夢の実現に役立つだろうし」。だが政治の世界は激烈で非情だ。しかも男性社会。嫉妬や意地悪は？「ウイ、ウイ、しよっちゅう！」と声をあげる。どう対応を？「私たちは女性であり母なのです。彼らは自分の息子だと考えるのです。寛容さも大切ですが、「小さなテロリー争い」などにかかわるのはつらい。ほかにたくさんやるべきことがある。「嫌になったら辞め、まらねべき」と明解、頼もしい。

女性へのアドバイスは？「男性のまねをしてはいけません。男性に負けまいと無理したり、男のようにな話し方や服装をしたり、女性であることを否定するような言動は問題外です。自分自身であること、自分を信じていることが大切」。ズバリ、では自分を信じるには？「アムール(愛)。両親の温かなまなざし、子どもたちからの期待、周囲の人のさまざまな愛を支える。信じる力になります。パートナーの愛も信じたい。4年前から一緒に住んでいます。やっと理解ある相手に巡り合えました。国や国民の幸福とはひと聞くと少し考え込んだけれど、ご自身の幸福とは？には、「アムール」と笑顔で即答。「私たちがのような立場の女性が、いい関係を築くのは難しい。すぐくインテリで、精神的なバランスがいい男性でないとうまくいかないですね」と付け加えた。



フランスの女性管理職のフアン・シヨンリターでもある。政界に入った彼女は先づ「受けとる」と人々の心を開き、スカーフやジュエリーで華やかに装うスタイルを「マダム・ラ・マキーズ」(侯爵夫人)などとして皮肉られたり、「国を代表する立場なので気を遣います。服装はハイモニーを大切に。バッグは好きですね。なかでもエルメスのケリーは革の手触りが大好き。美しいオブジェを手にするフイジカルの喜びを感じます」。十年半愛用しているケリーもあるという。

タブであることも政治家の資格の一つ。「徹夜してもまるでパカッパカッと寝てしまふことも、ある関係が打ち明ける。美と健康をキープする規律は？「吸わない、飲まない、2週間に一度くらいはとびきりのポルドーを一杯。間食はしません。でもチョコレートだけは例外、体にいいですから」とフレキシブル。「ヨガを毎朝20、30分、水泳を週一度、太ると気分も悪いし、服も買い替えることにもなりません」。規律ある生活が、職務をエレガントにこなす秘訣だ。



左手薬指には大きなダイヤのリング。「婚約指輪ではありません。自分で買いました。離婚記念に」



「働くよう努力中」と書かれた看板、楽しい！

村上新一の視点 Point de Vue

次の時代の新キーワードは 女性のまねをしない女性。

大臣のアシスタントで、友人でもあるマリエラさんにも話を聞くことができた。「こうした立場の人は、スタッフを出来る悪いダメ人間扱いするものだけれど、彼女は逆。下の人間を引き上げてくれるのです」と。「自分を無理に変えず、信じて、エレガントに仕事をこなす。新しい時代の女性像です」と言う。そうなのだ。だから連載の最後を飾るのは、グローバル時代を体現する存在である彼女らしいないと、高望みをしたのだ。この週ラガルドさんの受けた取材は、BBC、CNN、ガーディアン(イギリスの新聞)と本誌だったという。「いつもと違う話ができ非常に楽しかった、と大臣は言っていました」と、取材の後、広報担当者からメッセージが届き、私もうれしかった。

「働くよう努力中」と書かれた看板、楽しい！